

## 年間第 13 主日の説教

金 大烈 神父 2010 年 6 月 27 日 (日)

### 《民族の一致》

主の平和！

説教入る前にサマリア人の事について少し説明しておきたいと思います。皆様、聖書をよくご覧になっていますね。イスラエル人やユダヤ人とよくぶつかる民族がいます。それが今日の福音(ルカ 9・51-62)にも出て来て皆さんも知っているサマリア人です。何故イスラエル人がサマリア人を憎み敵対心を持ったのかについて説明致します。

紀元前 922 年にソロモン王が亡くなった時、イスラエルは北と南に分裂しました。そして北がイスラエル、南はユダヤになりました。二つの国にそれぞれの王が出来その王達の政治的な争いによって国民達も敵対心を持ちます。それから 200 年経ち紀元前 722 年に北イスラエルがアシリアという大きい国に滅ぼされます。紀元前 587 年にはユダヤもバビロンという帝国に滅ぼされます。先程、話した北イスラエルを征服したアシリアは、北イスラエルに対して民族抹殺の政策を広げます。それはイスラエルに周辺の民族の人々をイスラエルに入れ結婚させて、純粋な血が無くなるようにすることでした。そのように他民族の血が混じった人々が集まった場所がサマリアという地域でした。紀元前 433 年にバビロンから解放されて自分の国に帰って来たユダヤ人にとっても、そのサマリア地域の人達は優しい目で見ることが出来ませんでした。イスラエルへ残り最後までイスラエルとは全然違う文化を作り、変わった信仰の生き方をしていたのでサマリア人に対して、バビロンから戻って来た元々のイスラエル人は自分達の国にいる汚い雑種の民族と考えて追い出そうと考えていました。そしてサマリアの首都は今の時代までも長い間争っているパレスチナと言われる地域です。

とにかく、イエス様の時代は、北と南の形でなっているイスラエルという国土の真ん中にサマリア人が住んでいたわけです。当然、北や南の人達は中央のサマリア人の人々の事を快く思うことは出来ませんでした。長い歴史の中でその意識がどんどん強くなっていました。そして、時間が経ちサマリア人たちは歴史に埋まる事になります。

(現在、イスラエルとパレスチナの終わらない紛争は、又、イスラエルが滅びて世界のあちこちに散らされてから第二世界戦争が終わって戻った時、アラブから流れて来てパレスチナで定着したアラブ系の民族との争いです。イスラエルはそのパレスチナの人々を追い出そうとして、今も殺し合いをしています。)

イエス様が 2000 年前にこられた時のイスラエルは異邦人に対してあまりにも厳しい国でした。ユダヤ人は神様から選ばれた自分達以外は汚い民族だと考えていました。だから特に自分達の血を持っているサマリア人に対しても混ざった血を持った雑種の民族と言う理由でサマリア人を受け入れず排斥しようと苛めていました。ですから、サマリア人もイスラエル人、ユダヤ人に対して親しい心を持つはずではありません。そこに本当に大事な事が何か、神様を正しく信じることは何かと教える為にイ

イエス様が現れたのです。イエス様がされたいろいろな事の中で一つは民族間の敵対感・分裂を無くす努力でした。今は時代が変化してきて多くの国が多文化、他民族の時代を迎えています。自然に世界が変わって一目ではどこの系かわからない世界になります。様々な人が一つになって神様をたたえる事が出来ればそれが一番いい事だと思います。私達の心の中に否定的な排他的な心があるのでは無いかを今日の福音を通して考えて見ればいいと思います。

今日の福音でイエス様一行がサマリア人に歓迎されなく追い出された時、弟子達二人は腹を立ててどのような反応を見せましたか？福音を読んでみましょう。「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」(ルカ 54)と言いましたね。その話が終わった途端にイエス様はその二人を厳しくお叱りになります。イエス様が心を痛めて弟子達を戒められたのは共にしている弟子達さえ全然ご自分の心を押し量ってくれなかったことでした。何故サマリアの村を通過してエルサレムに上がろうとしたのか、ご自分が敵を愛しなさいと話したその理由さえ分からなかった弟子達をご覧になってみ心が辛かったんでしょう。ただ不思議な力・能力を持っているイエスという人物に命を掛け将来を見ればいいと考えで付いて行った12人の弟子達でした。すごい言葉ですね、「焼き滅ぼしましょう。」この言葉を聞いたイエス様の心はどの位痛かったのでしょうか。それなので叱りました。戒めました。

それでは、私達はどうか。イエス様を信じ、「イエス様、あなたに従います」と言いながらも全然反対の事をしている事はないでしょうか。そのような事をいつも振り返ってみる事も一つの私達の道だと思います。皆様、良く考えて見ましょう。もし自分が正しいと思っていた事が神様の御旨と全然違う事があるのではないかと、常に振替えて見ようとする事が私達の霊的な成長の為に必要であると思います。

今日の福音の最後に召し出しに関する話が出ます。この箇所を読むと人によって違う召し出しがあるみたいです。最初の方は「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」(ルカ 57)と言います。しかしイエス様はその人に「人の子には枕する所もない」(ルカ 58)と丁寧にあなたは相應しく無いと断ります。しかし別の方には「私に従いなさい」(ルカ 59)と言います。どういうことでしょうか。

若者が「自分はシスターになりたい。」「自分は司祭になりたい」と相談してくる時があります。その時の私の返事はいつも同じです。「識別する時間を持つように」と言います。それでも決心が固い時は修道会によって色も服も違うので自分に合う服を着られるまでゆっくり焦らずに良く考えるようにと、そして何より祈って欲しいと伝えます。あなたがなりたくてもイエス様が望まなかったらそれは出来ない、そしてあなたが辞めたくても、この召し出しの道をあきらめたくてもイエス様が手を離してくれなかったら、あなたは逃げる場所がないとはっきり言います。

自分に与えられている召し出し、使命、呼びかけは何であるかを良く考える毎日、そして一生にならなければならないと思います。

ありがとうございました。